

文学散歩報告 いたち川沿いを歩く

高熊 哲也

今年度(二〇二〇)は新型コロナウイルスの感染拡大で、大会が中止され、総会も紙面実施となり、なかなか例会が開けない状況が続きましたが、感染状況が小康を保ち、屋外の文学散歩なら可能かということで、以下の形で企画・実施いたしました。実施報告を記します。

【日時】九月一二日(土) 一〇:〇〇～一二:〇〇

【主題】いたち川の地蔵群を巡り、あわせて宮本輝の「蜩川」の舞台を歩く

*石倉町延命地藏尊周辺

まずは、石倉町延命地藏尊前に集合。参加者は、黒崎さん、近藤さん、高熊の三名だけでしたが、状況に鑑みやむをえません。ささやかながら本会の活動再開を喜ぶと同時に、一刻も早い感染収束を地藏尊に祈りつつ、散策を開始しました。

宮本輝の「蜩川」の末尾では主人公水島竜夫、竜夫が密かに思いを寄せる英子、夫重竜を亡くしてこの蜩狩りにこの後の身の振り方を占おうとする竜夫の母千代、案内役の銀蔵が、いたち川を遡る道行きが描かれます。地藏尊の西側富岩街道を渡ったあたりが豊川町で、作品の中では竜夫の住まいがあつたと設定されています。宮本輝自身が富山にいたときに住んでいたところもこの豊川町です。

地藏尊の東側、いたち川に架かる泉橋を渡ったところに、源氏鶏太の生家があつたことについては、今回も参加された近藤さんがご紹介なさつたことがあります。橋のたもとには源氏鶏太の文学碑が建っています。地藏尊前の石倉町には飲食店などが軒を連ねる商店街があります。かつては川向こうの遊郭(東町)への中継ぎをするところとして栄えていたようです。店名は伏せますが、おそば屋さんや焼き肉店など、多くの御常連さんをお持ちの名店が、ここ数年相次いでお店を閉められたのは寂しい限りです。

お地藏さんへの信仰は篤く、町々で今でも夏には地藏祭りが行われています。一つには安政五(一八五八)年

の飛越地震によるトンビ崩れが引き金となって、神通川を流れ下った土石流がいたち川にも流入して甚大な被害を出したこと、もう一つには、太平洋戦争時富山市街を灰燼に帰せしめた大空襲の記憶、失われた命への鎮魂の祈りが引き継がれての信仰だと思いをいたしました。（地藏群の発祥は大地震を遡る）

*どんどこかつちゃ

まだ残暑の日差しを桜並木でよけながら、東橋、久右衛門橋、このて橋……といくつもの小橋を横目に見ながら上流へ向かうと水神社橋のたもと水神社にいたります。このあたりから川の流れにさざ波が立つようになります。奥田用水の取水堰堤としてどんどこ公園が整備されたのは二〇〇三年だそうです。そもそも「どんどこ」という呼称は、急な川の流れをコントロールするために設けられた堰を流れる水音によるもの。同名の公園が砺波市にもあります。水辺に涼を求めるスポットとして近隣の人々に昔から親しまれてきました。

どんどこから上流にむけてかつて「かつちゃ」と呼ば

れる水車群がありました。こちらも水車の力を利して米や麦、さらには菓の原料を搗く音（擬音語で言えばがちゃん、ぐらいでしうか）からの呼称かも知れせん。伏木で曳山をぶつけることを「かつちゃ」と呼ぶ例が思い出されます。また富山では米や餅を搗くことを「かつ」と言います。特に菓かつちゃは匂いがきつく、当時の思ひ出話が後掲の参考図書「鮎側の記憶」に膏薬工場の存在などとともに語られています。

「かつちゃ」は「蛍川」が舞台とする一九六〇年代にはほぼ姿を消していたと思われませんが、「どんどこ」からだんだん町の灯を離れ、蛍を目指して次第に暗くなっていく道を童夫たちがたどったのでしょうか。

*立山道道標と馬頭観音

通称有沢線を渡ってさらに上流に向かうと、左前方に立山連峰が姿をはつきりさせてきます。富山地方鉄道不二越線の踏切を越す手前に、上野（うわの）の酒屋がありました。筆者が大泉中学出身の知人（六十五才）が、かつては賑やかだったことを懐かしそうに語ってくれま

した。大泉駅の西側で、いたち川と広田用水、鉄路と道路が入り組み、道路の拡幅整備の計画がなかなか進まず、上野の酒屋の跡地は今も空き地のままです。その空き地の角に、立山道への道標が残っていて、天保十一年の年号が刻まれています。酒屋跡の空き地を左に踏切を越えて行くと、筆者の勤務校富山高専専門学校（本郷キャンパス）に至ります。その先北陸自動車道を越えて直進すると上滝にいたり、常願寺川を渡ると雄山神社前立社壇です。今回は訪れませんでした。本郷の地には立山信仰と縁の深い刀尾神社^{たちお}があり、かつてこの立山道を通して登山を志すものは必ず拝礼してから向かったということです。

なおもいたち川にそって歩みを進めていくと、まもなく大きなケヤキの木陰に馬頭観音があります。慶応元年建立と裏に刻まれています。このあたりまで来ると、ほぼ川沿いは田んぼになります。大きな車道からは外れ、現在は大泉あたりからだど巨木と馬頭観音の存在には気づきませんが、かつては大泉よりかなり北からでも望めたランドマークだったはず。富山の町を離れ神聖な立山の世界へ向かうスタートラインにあたるのが実感

されました。

* 蛍の舞う地

最後に、「蛍川」のラストシーンで蛍が群れ舞ったのはどのあたりか？という疑問にいきつきます。広瀬誠が「鮎川の記憶」で「戦災と蛍の大量」と題して、角川源義が富山大空襲の折に、いたち川沿いで蛍の大量に出会った思い出を辺見じゅんに話したエピソードを紹介し、広瀬自身が蛍を見た経験も語っています。しかし作品の中の蛍の舞う地は大泉からかなり遡っており、角川や広瀬の見た位置ともずれそうです。また、管見に入った限りでは、作品に描かれたような蛍の群れの直接のモデルにあたるようなエピソードや言い伝えに接したことはありません。

本郷地区出身の筆者の叔母（宮本輝と同年代）にも尋ねて見ましたが、本郷あたりでそういう話は聞かないということでした。かつてはこの農村でも蛍は舞っていましたから、意外と記憶には鮮明には残らないのかも知れません。今回も蛍の舞う地は謎のまま残されてしまっ

たなど、散歩の帰途に訪れた蜷川の文学碑の傍で、モデルと「虚構」の狭間を行きつ戻りつ。

☆参考文献 島原義三郎・中川達編「鼬川の記憶」桂書房（二〇〇四年）